
スクールカウンセラーのための 仕事術

はじめて学校で働くための手引き

青木真理著

明治図書出版, A5判144頁, 1,936円, 2024年2月刊

(神戸市スクールカウンセラー／兵庫県立西宮病院／

大阪大学医学部附属病院)

増田温子

本書はスクールカウンセラー（以後SCと表記）の入門書であり、これからSCを目指す心理職が読むには、SCとしての心構えや業務内容などが的確にまとめられており、大変読みやすい一冊であった。

テーマ別（例えば、「不登校」「いじめ」「親面接」など）の架空事例に対して、SCが面接の中でどう対応するのか、一言一句リアルに描かれており、学校現場での面接場面が具体的にイメージしやすかった。

また、SCの外部性と専門性や、雇用形態、求められる四つの力（アセスメント力、関係調整力、連携力、企画力）と、学校組織の説明も、簡潔にまとめられており、大変わかりやすかった。

本書を読んで、評者もSCという仕事は「有機心理総合職」と耳にしたことがあり、教育、医療、福祉、司法などのさまざまな領域での、多様な臨床知や経験知が、総合的に試される職種であると、日々実感している。さらに、これは評者の意見ではあるが、SCの学問として発展途上なところは、地域差や学校差があまりにも大きすぎて、SC業務を構造化して研究するのが難しく、純粋な心理療法の実践とも言いづらいため、実践知が学問知として集積されにくい点があろう。そのためSCは、各学校の地域性や特色にジョイニングしながら、周辺地域のSCやスクールソーシャルワーカーとも連携を取りつつ、その風土に合うように、臨機応変にカスタマイズして専門性を発揮せねばならない。評者の場合は、まず、初勤務日には地域を歩き、学校を取り巻く雰囲気や自らの体で体感し、その後、先生方に学校の特色などをお聞きしている（学校アセスメント）。管理職に「校務分掌」と「年間行事」をいただき、「校

内委員会」や「ケース会議」への積極的な参加意向を示して、管理職だけでなく、特別支援コーディネーターや、養護教諭の先生、生徒指導担当の先生、学年総務の先生方などと、普段から顔と人柄の見えるコミュニケーション作りを図るようにしている。また、本書にも書かれていた通り「カウンセリングの申し込み方」や「広報」などを工夫することも重要であり、具体的には、「スクールカウンセラーだより」の作成や、「心理教育プログラム」の実施などによって、普段から生徒や保護者にも、SCの存在を周知していただけるように心がける必要がある。ただし、SCはあくまでも学校内では脇役であることを肝に銘じ、出すぎた真似をしてはいけない。教員や保護者にとって脅威にならないように、だからと言って相談室に閉じこもったりはせず、バランスよくプロアクティブに学校に関わっていく姿勢が大切であろう。自然に溶け込み、「何かあったときはSCへ」という共通認識を持てただけると、普段からの校内連携は言わずもがな、何か重大事案が起きた際にも、学校を通して、外部との多職種連携や協働などをさせていただきやすい。これが、本書で書かれておられる、SCの「外部性」と「専門性」と「チーム学校」の集大成であろうと理解し、大変学びとなる一冊であった。
